

修士論文（要旨）

2024年1月

仮想的有能感に着目した「いじめ関与行動」の個人内生起プロセスの検討

指導 池田 美樹 准教授

国際学術研究科

国際学術専攻

心理学実践研究学位プログラム臨床心理分野

222J2003

杉山 佳

Master's Thesis (Abstract)  
January 2024

An examination regarding the intra-individual generative process of bullying  
involvement behavior focusing on assumed competence.

Kei Sugiyama

222J2003

Master of Arts Program in Clinical Psychology

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Miki Ikeda

## 目次

序章	1
第1章 問題と目的	1
1-1 いじめの現状と構造	1
1-2 仮想的有能感	2
1-3 仮想的有能感と共感性	2
1-4 いじめにおける集団の影響	3
1-5 仮説	4
第2章 研究方法	5
2-1 対象者	5
2-2 時期	5
2-3 手続き	5
2-4 質問調査用紙の構成	5
2-5 分析方法	7
2-6 倫理的配慮	8
第3章 結果	8
3-1 記述統計	8
3-2 因子分析	8
3-3 調査に使用した各尺度間の2変量の相関	11
3-4 パス解析による仮説モデルの検討	13
3-5 クラスタ分析	14
3-6 有能感4類型ごとの各尺度間の2変量の相関	19
3-7 「制裁的場面」「異質性排除・享乐的場面」での「いじめ関与行動」の差の検討	24
第4章 考察	25
4-1 考察	25
4-2 総合考察	30
参考文献	I
添付資料	II

## 序章

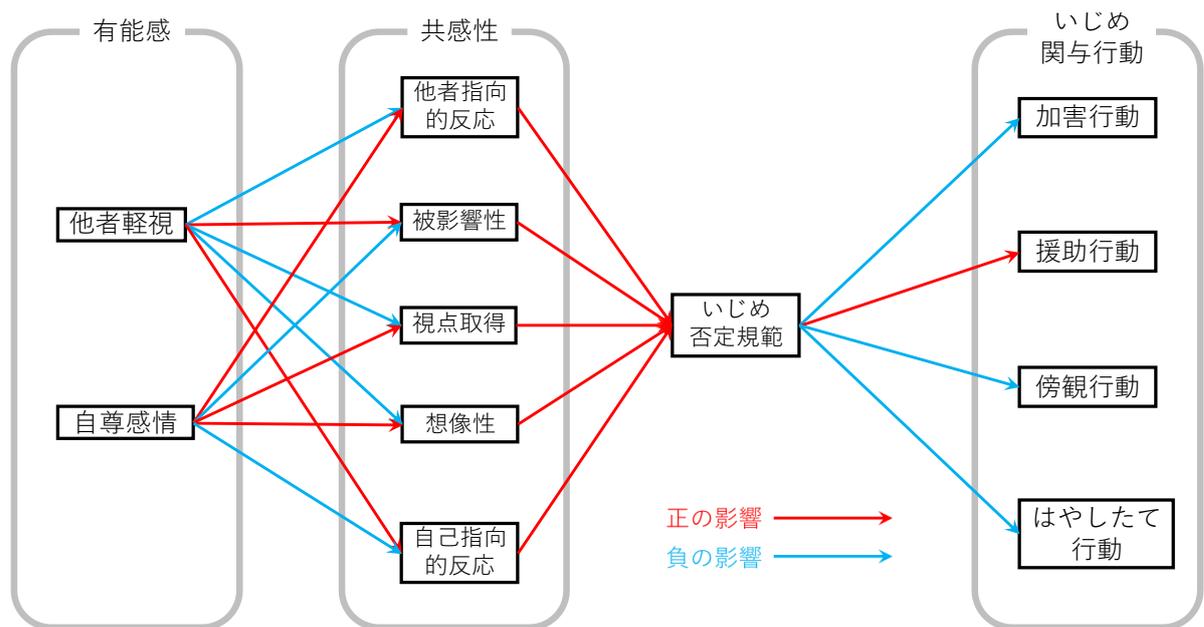
### 第1章 問題と目的

#### 1 問題と目的

「仮想的有能感」(Assumed Competence ; 以下 AC と略記) は「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」(速水・木野・高木, 2004) と定義され、4つのいじめ関与行動(加害者, 被害者, 傍観者, 観衆), および AC と共感性の関連が示されている(速水, 2012)。

いじめにおける集団に対して、いじめ否定規範は影響ある。そのため、いじめ否定規範を媒介しいずれかのいじめ関与行動が現れると考えられる。以上から本研究では、AC を起点として位置付けた場合、共感性がいじめ否定規範を介していじめ加関与行動に影響を与えるという仮説モデル (Figure 1) を設定し、検証を行うことを目的とする。なお、本研究では AC として、「他者軽視」と「自尊感情」の組み合わせによる有能感4類型を用いてモデル図の検討を行う。

Figure1 仮説モデル図



各パスの影響の方向性は以下の①～④に示す通りである。

- ① 「他者軽視」が「他者指向的応答」「視点取得」「想像性」に負の影響、「被影響性」「自己指向的応答」に正の影響を及ぼす。
- ② 「自尊感情」が「他者指向的応答」「視点取得」「想像性」に正の影響、「被影響性」「自己指向的応答」に負の影響を及ぼす。
- ③ 「共感性」の下位因子「他者指向的応答」「被影響性」「視点取得」「想像性」「自己指向的応答」がそれぞれ「いじめ否定規範」に正の影響を及ぼす。

- ④「否定規範」が「援助行動」に正の影響を及ぼし、「加害行動」「傍観行動」「はやしたて行動」に負の影響を及ぼす。

## 第2章 研究方法

### 2-1 対象者

本研究の対象は、都内のA公立中学校に在籍する359名（男子171名、女子179名、他3名、不明6名）を分析の対象とした。

### 2-2 手続き・時期

各学級で担当教員から配布していただき、全学級一斉に質問紙調査を実施した。保護者への周知と同意は、事前に書面にて確認を行った。生徒に対しては、当日に各教室に一斉に再度調査の説明を口頭で行い、質問調査紙には生徒からインフォームドコンセントを得た。2023年11月に実施した。

### 2-3 調査用紙の構成

①フェイスシート（研究協力に関する倫理的配慮と同意の確認を含めた説明文）

②学年・性別

③共感性

多次元共感尺度（鈴木・木野，2008）を使用。24項目を「全く当てはまらない」（1点）から「とても当てはまる」（5点）までの5件法で求める。

④いじめ否定規範

「いじめ否定規範」（大西・黒川・吉田，2009）を使用。7項目を「とてもいい」（1点）から「とてもまずい」（7点）までの7件法で求める。

⑤いじめ関与行動

いじめ関連行動（蔵永・片山・樋口・深田，2008）と中学生用攻撃行動尺度（Aggressive Behavior Scale for Adolescents; ABS-A；高橋・佐藤・野口・永作・嶋田，2009）を参考に独自で作成した「いじめ関与行動尺度」を用いる。18項目「違う」（1点）から「その通り」（5点）までの5件法で求める。

⑥いじめ生起可能場面

いじめ生起可能場面は、大西他（2009）の分類に基づいて「異質性排除・享乐的」と「制裁的」を提示場面として作成。

⑦有能感

仮想的有能感尺度 Ver. 2（Assumed Competence scale Ver 2.；ACS-Ver 2 速水・木野・高木，2005）と「自尊感情」（山本・松井・山成，1982）を参考に本研究用に独自に修正を加え作成したもの。10項目「全く思わない」（1点）から「よく思う」（5点）までの5件法で求める。

## 2-4 倫理的配慮

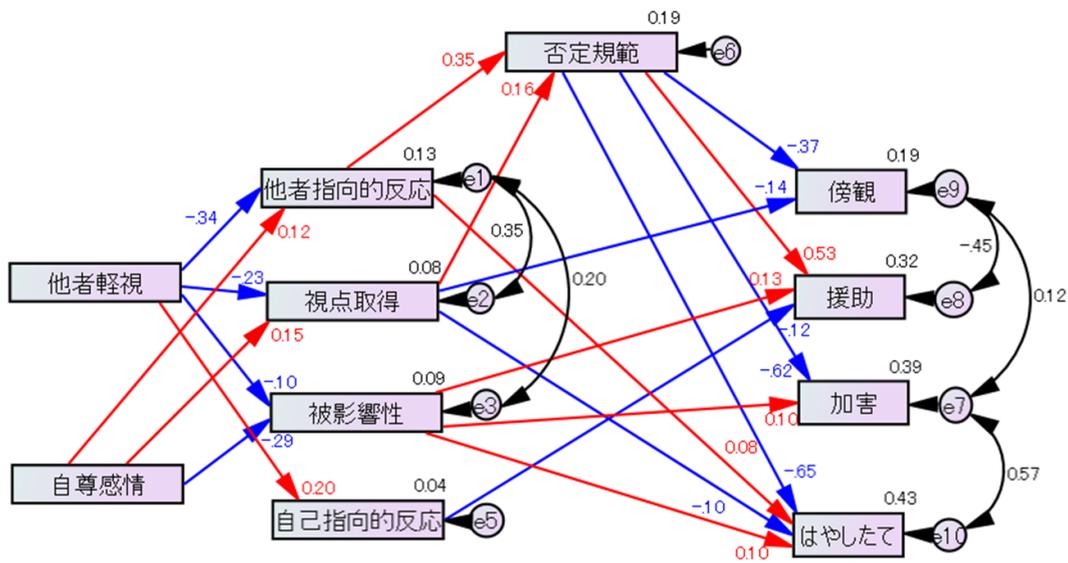
桜美林大学研究倫理委員会の研究倫理申請の承認を得ている（受付番号 22073）。

## 第3章 結果

### 3 パス解析による仮説モデルの検討

仮説モデル図（Figure）を基に、算出した各因子の相関を考慮したパスを追加し、Amosを用いたパス解析によって検討した。最終的に、 $\chi^2 = 79.82$  ( $p < .001$ ), GFI=.96, AGFI=.91, CFI=.96, RMSEA=.07 となり、いずれも良好であった。（Figure 2）。

Figure 2 修正した仮説モデル図



## 第4章 考察

### 4-1 考察

仮説モデルの検討のため共分散構造分析を行った結果、①「他者指向的反応」、「被影響性」、「視点取得」に負のパス「自己指向的反応」に正のパスが有意。②「他者指向的反応」、「視点取得」へ正のパスが有意。③「他者指向的反応」、「被影響性」、「視点取得」から「いじめ否定規範」へは正のパスが有意。「他者指向的反応」から「はやしたて行動」に負のパスが有意。「視点取得」から「傍観行動」、「はやしたて行動」に負のパスが有意。「想像性」から有意なパスはなかった。「自己指向的反応」から「いじめ否定規範」へは有意なパスはなかったが、「援助行動」へ負のパスが有意。④「援助行動」に正のパス、「加害行動」、「傍観行動」、「はやしたて行動」に負のパスが有意。

おおむね仮説通りの結果であった。一方で、「他者軽視」から「想像性」、「自尊感情」か

ら「想像性」などの仮定していたパスが有意でなかったことや、「他者指向的反応」から「はやしたて行動」, 「視点取得」から「傍観行動」と「はやしたて行動」などの仮定していなかった直接結ばれた有意なパスが見られた。

#### 4-2 総合考察

本研究では、ACが他者指向的共感性に負の影響を与え、いじめの否定規範を介して「援助行動」が生起することが示唆されたため、ACを低減させることで他者指向的共感性を促進させることができると考えられる。他者指向的な共感性を持つことによって個人がいじめの否定規範を意識しやすくなり、いじめに否定的な集団規範が形成され、加害行動、はやしたて行動、傍観行動が抑制され、援助行動が促進されることが考えられる。一方で、共感性が低くともいじめ否定規範があれば、加害行動、はやしたて行動、傍観行動の抑制と、援助行動の促進がされる可能性が示されている。そのため、いじめ否定規範をより意識しやすくするには他者軽視傾向の抑制と自尊感情の促進することで生じる他者指向的な共感性が高いことが望ましいと考えられた。しかし、個人が持つスキルや人間関係など本研究で取り扱わなかった多くの要因が想定される。効果的ないじめ防止の対策を考えるうえで「いじめ関与行動」の選択及び表出に影響を与える要因を検討することが必要である。

## 参考文献

- 伊藤 美奈子 (2017). いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究-「自尊感情」に着目して- 教育心理学, 65(1), 26-36
- 大西 彩子・黒川 雅幸・吉田 俊和 (2009). 児童・生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響—学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目して— 教育心理学研究, 57,324-335.
- 大西 彩子・吉田 俊和 (2010). いじめの個人内生起メカニズム—集団規範の影響に着目して— 実験社会心理学, 49(2),111-121.
- 蔵永 瞳・片山 香・樋口 匡貴・深田 博己 (2008). いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響, 広島大学心理学研究, 8,41-51.
- 鈴木 有美・木野 和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, 56(4),487-497.
- 鈴木 有美・木野 和代・出口 智子・遠山 孝司・伊田 勝憲・大谷 福子・谷口 ゆき・野田 勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み—名古屋大学大学院教育 発達科学研究科紀要, 47,269-279.
- 澄川 采加・稲垣 勉・島 義弘 (2021). 仮想的有能感と自己愛—両者を構成する要素と他の諸変数との関連— 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 30,61-70.
- Davis,M.H (1994) *Empathy: A social psychological approach. Madison, WI:Brown & Benchmark.* (デイヴィス,M. H. 菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学 川島書店)
- 中村 玲子・越川 房子 (2014). 中学校におけるいじめ抑止を目的とした心理教育的プログラムの開発とその効果の検討 教育心理学研究, 62(2),129-142.
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討—名古屋大学大学院教育 発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51,1-7.
- 速水 敏彦 (2012). 仮想的有能感の心理学 北大路書房
- 速水 敏彦 (2006). 他者を見下す若者たち 講談社
- 平野 美沙子 (2015). いじめを考える心理学—いじめの深刻化を防ぐために— 環境と経営: 静岡産業大学論集, 21(1),9-16.
- 本間 友巳 (2003). 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学, 51(4), 390-400
- 森田 洋司・清永 賢二 (1994). 新訂版 いじめ—教室の病— 金子書房
- 王 影・桜木 惣吉 (2016). いじめ場面における傍観者の共感性といじめ関連行動との関係—愛知教育大学健康支援センター紀要, 15,3-10.
- 総務省 (2023). インターネットトラブル事例集—2023年版— Retrieved December 25, 2023 from [https://www.soumu.go.jp/use\\_the\\_internet\\_wisely/trouble/](https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/trouble/)
- 文部科学省 (2023). 令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果 Retrieved December 25, 2023 from [https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt\\_jidou01-100002753\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf)